

資料と公共性 : 2018年度研究成果年次報告書

岡崎, 敦

九州大学大学院人文科学研究院 | 九州大学大学院統合新領域学府 : 教授

市澤, 哲

神戸大学大学院人文科学研究科 : 教授

石田, 栄美

九州大学附属図書館 | 九州大学大学院統合新領域学府 : 准教授

後小路, 雅弘

九州大学大学院人文科学研究院 : 教授

他

<https://doi.org/10.15017/2230688>

出版情報 : 2019-03-14. 九州大学大学院人文科学研究院

バージョン :

権利関係 :

「とはすかたり 一文学部の肖像」展ができるまで

後小路 雅弘

九州大学は、2018年秋には文科系学部の引っ越しを終え、伊都キャンパスへの移転を完了した。わたしは、移転を前にして、美術史や美術館学を研究する教員個人として、また、文学部歴史編纂室の室長として、箱崎キャンパスの記憶をどのように形象化し、記録していくのかということを考えていた。当初浮かんだぼんやりとしたアイデアは、結果的に、伊都キャンパスの椎木講堂ギャラリーでの「とはすかたり 一文学部の肖像」という美術展として実を結ぶことになった。

当初、わたしが持っていたアイデアは、アイデアというよりむしろひとつのイメージだった。移転を終え、廃墟のようになった箱崎キャンパスの文学部の建物の、がらんとした教員たちの研究室に小さなモニターが置かれ、そこからその部屋のかつての住人の声が流れ、彼らの箱崎での活動の思い出が語られ、その思い出にまつわる「もの」がぼつんと置かれている、というようなイメージだった。

しかし、わたしはこのイメージを実際に形にすることは、たいへん困難なことのように思われ、それを実現することはあきらめていた。わたしは歴史編纂室の会議の場で、議題を話し合った後の雑談の中で、果たせなかった夢として、このイメージについて語った。それは室員たちの意外な高評価を得た。室員のひとり飯嶋秀治准教授は、持ち前の行動力で、たちまちそのあいまいなアイデアを基に、実現可能なひとつのプロジェクト案を作り上げた。それは、「九州大学人社系研究拠点形成のための記録・保存・展示」という課題名で、九州大学の平成29-30年度QRプログラムの人社系アジア研究活性化重点支援のプロジェクトに採択された¹⁾。もちろん、その過程で、当初のアイデアは多少形を変えていった。

そのプロジェクトの中核をなすのは、人社系学部の教員たちの3分間のインタビュー映像で、研究室の思い出、思い入れのある一品、現在の課題を研究し始めたきっかけ、について語られている。なお、文学部の教員は52名がインタビューに応じた(2名が辞退)。制作は映画監督の萱野孝幸が担当した(1名のみ桂木勝彦が撮影)。そのインタビュー映像は、文学部歴史編纂室において、文学部の貴重な記録としてアーカイブ化されることになる。

わたしは、この教員のインタビュー映像を素材に、展覧会を構成しようと考えていた。いずれにしろ、これらの映像は、30年度末には、QRプロジェクトの研究成果として公開する必要があった。

他方で、わたしは、文学部の教員として「美術史実習」という科目を担当してきた。大学教員になる前に、美術館学芸員として働いてきた経験を活かし、実際に展覧会を企画実施する授業を行ってきた。その授業は、対外的にAQAプロジェクト²⁾を名乗り、美術史を

学ぶ学部生を中心に行われ、キュレーターシップやアート・マネジメントを実践的に学んでいる。この展覧会の企画実施は、実質的に、この AQA プロジェクトに委ねることにした。

展覧会の実現に向けた AQA プロジェクトの議論の中で、展覧会の出品作品は、文学部教員 52 名のインタビュー映像（実際には 2 名が展覧会への出品を承認しなかったので、50 名）と、その中から選抜した 12 名の教員の「思い出の一品」、そして文学部が所蔵する歴代教授たちの肖像画から 10 点を選び、展覧会を構成することにした。しかし、この内容では、「資料展示」ではあっても「美術展」とは言い難いし、展覧会としての深みが足りないように感じられた。そこで、北九州市を拠点に美術活動を行っている現代美術家鈴木淳に参加を要請することにした。いわば真面目なインタビューや肖像画の展示を、相対化し、批評性を持たせ、現代美術展として構成することが目的であった。

そのわれわれの意図を汲んで、鈴木は、肖像画に描かれた昔の教授に、ゆかりの研究室の現在の教授がインタビューする映像作品を作ることを提案した。文学部の 10 名の教授が、肖像画に描かれた物言わぬ先学にインタビューを敢行するという、不思議な無理難題に、訝しがりながら、不安がりながらも、快く応じてくれ、きわめて真摯に取り組んでくれたと思う。その結果物言わぬ肖像画の声がたしかに聞こえたような気がした。そして、12 の一品を語るインタビュー映像をモニターで見せるのに、九州大学の移転で捨てられた什器を再生する活動を行っている九州大学総合研究博物館の協力で、再生された机やテーブルを積み上げて会場を構成し、それら 12 のインタビュー映像のことばを、すべて平仮名の帯にして什器に巻き付けた。また、オープニング・イベントとして、「似木絵、どうです？」というパフォーマンスを行った。これは、段ボール製のチープな樹の下で似顔絵ならぬ「似木絵」、つまりモデルを木に見立てて描くもので、4 人の文学部教員がモデルになった。このパフォーマンスは肖像画を相対化する意義深いものであった。

展覧会場は、文学部教員たちのさまざまな声（沈黙の語りも含め）が響きあうポリフォニックな場となった。鈴木淳さんが、箱崎の歴史を体現する再生什器を使って会場構成したことで、わたしが当初夢想した、主の去った箱崎の研究室に主の声が響くというイメージが創出されていたように思われる。

付記

鈴木淳×AQA プロジェクト「とはすかたり ―文学部の肖像―」展

会期 平成 31 年 2 月 1 日（金）～平成 31 年 3 月 20 日（水）

開館時間 10:00～17:00 日曜祝日休館

会場 九州大学伊都キャンパス 椎木講堂ギャラリー

主催 九州大学文学部 文学部歴史編纂室 AQA プロジェクト

註

1) QR プロジェクト (プログラム)

QR プロジェクトとは、「QR プログラム特定領域強化プロジェクト」の略称である。本プロジェクトは、「QR プログラム (Qdai-jump Research Program) 特定領域強化プロジェクト」の一環として、九州大学人間環境学研究院飯嶋秀治准教授を代表に構成されるものである。

参考：九州大学公式サイト <https://www.kyushu-u.ac.jp/ja/research/support/other>

飯嶋秀治個人 HP http://www2.lit.kyushu-u.ac.jp/~com_reli/ijjima/

2) AQA プロジェクト公式サイト <http://aqa.aikotoba.jp/>